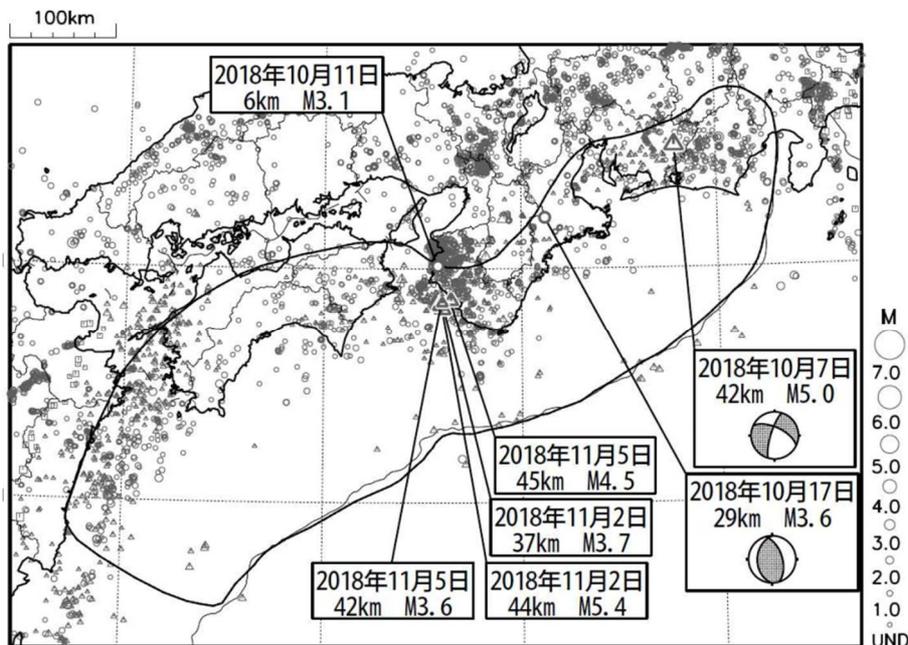




紀伊半島沖(紀伊水道)の地震の続報

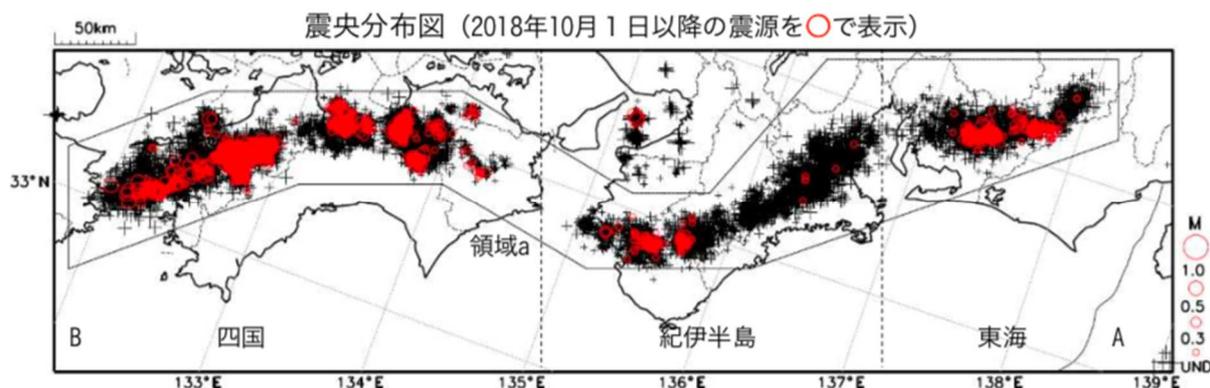
先週号のニュースレターで、紀伊半島沖の地震が極めて珍しいものであった事を報告させて頂きましたが、11月7日に気象庁がこの活動についての資料を公表しました。

下の図は気象庁作成の図で、2018年10月1日から11月5日までに観測された地震を示しています。

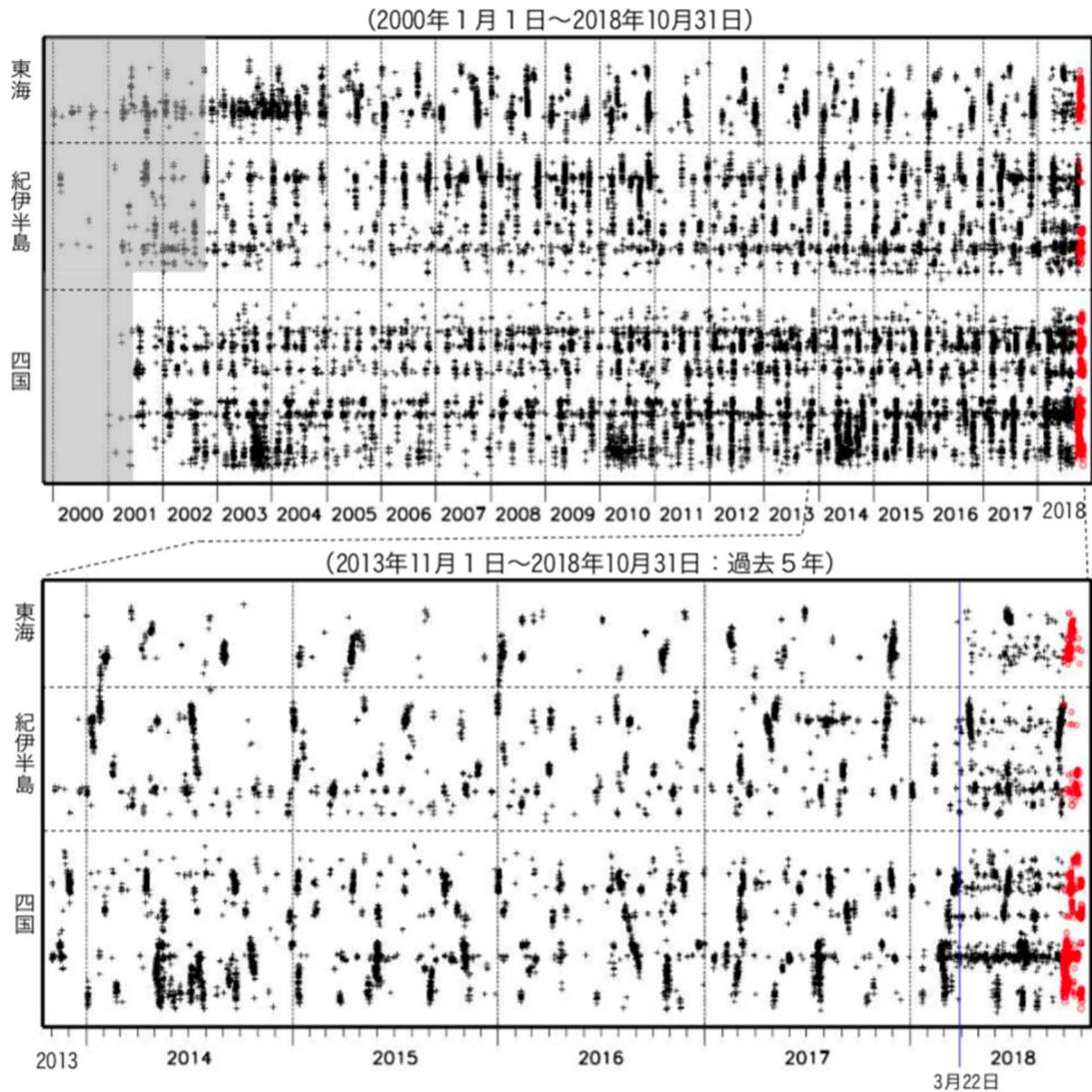
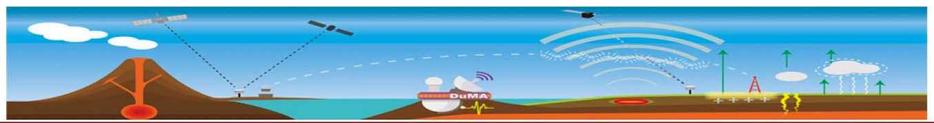


また10月7日には、愛知県東部でマグニチュード5.0の地震も発生しています。これらは、西南日本で観測される“深部低周波微動”という現象に関係して発生していた可能性が高いようです。

深部低周波微動というのは、日本が西日本で発見した現象で、今後の南海トラフ地震の発生予測で極めて大きな役割を果たすと考えられている現象です。重要なのは、この現象は繰り返し発生しているのですが、体を感じる地震では無い事です。この深部低周波微動が発見された歴史などは今後解説して参ります。



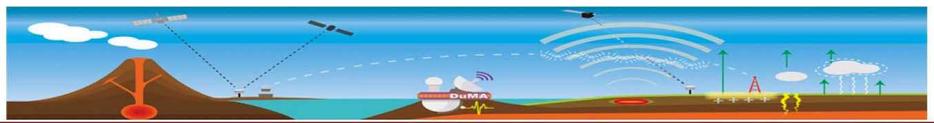
上の図は、2000年1月から2018年10月末までの**およそ19年間という長い期間**に観測された深部低周波微動の発生状況を表したもので、**赤**で示されているのが先月(2018年10月)に観測された微動です。



上の図は、前ページの領域 a となっている、東海地方から紀伊半島を経て、四国までの領域でいつ深部低周波微動が発生していたかを示しています。横軸が時間軸で年が単位となっています。どのセグメント(東海、紀伊半島、四国)でもそれぞれ発生間隔は違いますが、かなり規則的にこの現象が発生している事がわかります。ただ今年になって、発生頻度が大きくなっているように見えますが、今年3月22日以降はデータ処理方法が変更されたためという事が発表されています。決して今年になって発生頻度が大きくなったという事ではありません。

問題なのは、処理方法を変更し、より感度が高くなるのはいいのですが、過去との比較においては、同じ解析手法で作成した図も必要ではないのかという事です。理論的な考察では、この深部低周波微動が、“本番の”南海トラフ巨大地震の前には発生間隔が短くなり(=発生頻度が高くなる事を意味する)、巨大地震が発生すると考えられているのです。

我々は紀伊半島沖を含む近畿地方での地震活動静穏化が現在解消に向かっている事を報告していますが、この紀伊水道の地震活動は今後推移を十分注意すべきものと考えています。

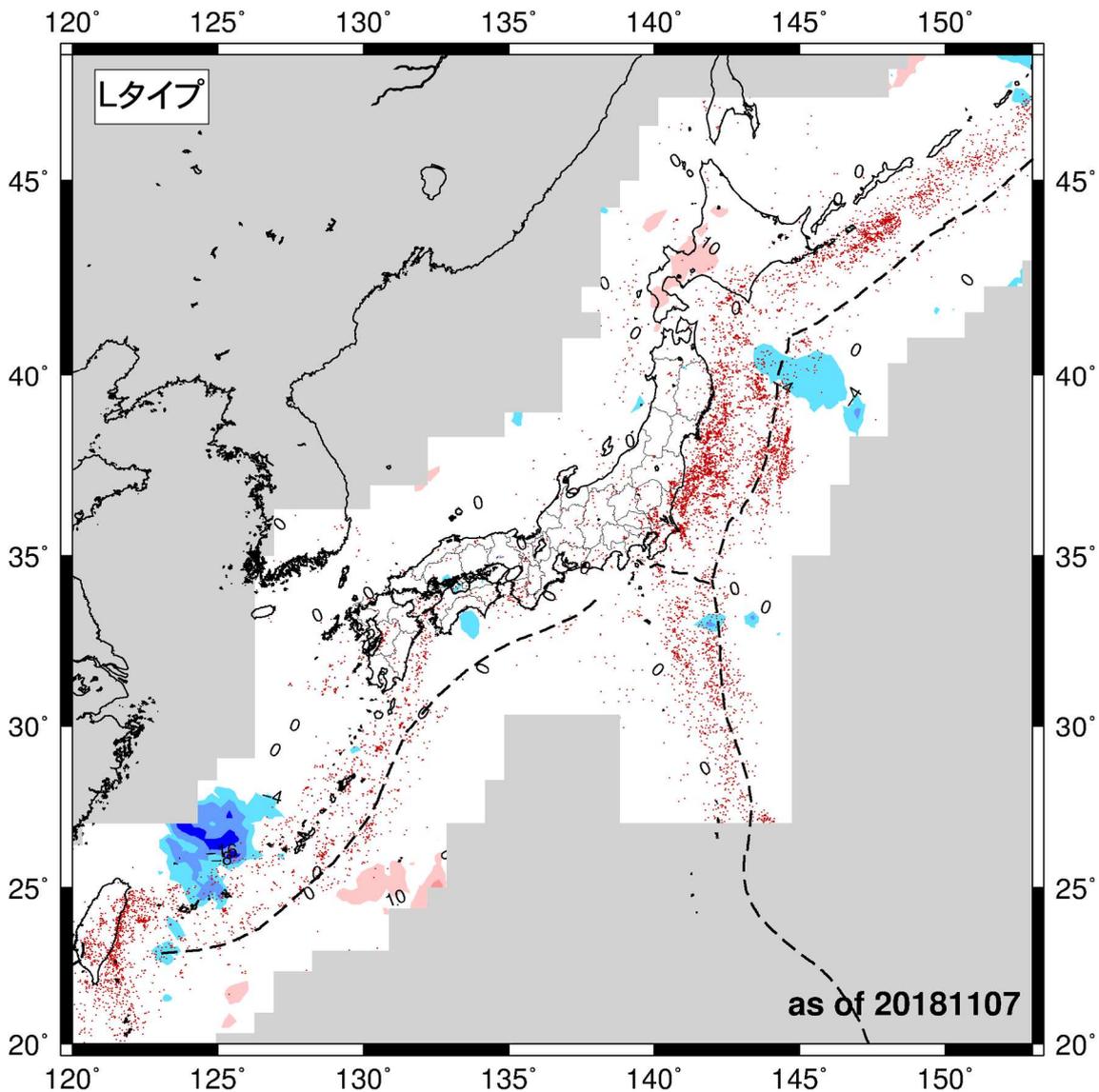


日本およびその周辺の広域地下天気図®

今週は10月1日のニュースレターに引き続き現在の気象庁の観測網で解析できる最大範囲の領域の解析です。また解析期間は2011年の東日本大震災以降の7年半ほどのデータを使っています。これは東日本大震災という超巨大地震のため、この震災を境に日本列島全体の地震活動の特徴が大きく変化してしまったためです(特に東北・関東地方)。

今週は11月7日時点の **Lタイプ** の地下天気図をお示しします。

この地下天気図は M7クラス以上の大きな地震発生を予測するものです。



沖縄西方(台湾北東)海域に大きな地震活動静穏化領域(青い領域)が広がっていますが、これはあまり深刻な異常では無いと考えております。これはもともと、この地域は地震活動が極めて低い地域であり、少数の地震が解析に大きな影響を与えている可能性が高いのです(特定の少数の地震を過大評価している可能性が高い)。

地下天気図解析に限らず、地震活動度を用いた解析では、基本的にある程度の地震が定常的に発生している事が肝要なのです。